
この、胸の中に

音川 幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この、胸の中に

【Nコード】

N3659A

【作者名】

音川 幸

【あらすじ】

先天性心臓病の少女と、暴力団員の少年。全く接点のない彼等が、互いに惹かれあうのは、なぜ…？

Prologue

「今日は学園祭でした。」

俺のクラスは演劇だったみたいだけど、学校にあんまり行っていない俺は、照明係りでしたよ。

別に主役なんか興味ないけど、

でもやっぱりなんだかちょっと悲しくて

きちんと学校行ったらよかったかな、なんて思っています。

今までそんな風に後悔したことなんてなかったのに、
変ですよ

だんだんと冬が近付いてきました。

朋子さんは体の調子いかがですか？

風邪だけは、くれぐれも引かないように、気を付けてくださいね。

また、そちらへ伺います

鉄平」

その、胸の中に

雪の降る夜（前書き）

幼い頃より朋子の主治医をしている佐久間は、毎晩朋子の部屋を訪れる。…少しでも、彼女を一人にしないために。

雪の降る夜

「あたし、雪って嫌いよ」

1月の半ば、窓の外を静かに舞う雪をぼんやりと見つめながら、少女は唐突にそう呟いた。

その言葉とは裏腹に、少女の表情には嫌悪の色はない。しかしその語勢から、少女の言葉がその通りの意味を持っていることは窺える。

「…どうして嫌いなんだい？」

佐久間はそんな少女の様子に小さく笑い、側にあつた丸イスを引いて腰を下ろす。

「…嫌い。ただ嫌いなだけ」

少女は少し戸惑うように言葉を溜め、そして今度ははっきりとした口調で言い切った。

佐久間は股に肘をつき、前屈みになりながら少女を見つめる。

この少女には“美少女”という単語がふさわしい―、と佐久間は思う。少女肩下まで伸びた髪は黒く艶やかで、眉にかかる程度で切り揃えられた前髪の合間からは意思の強い瞳が覗いている。

して時折見せる憂いをおびた表情には、どこかどきりとさせられるものがあつた。

40も歳の離れた少女にさすがに恋愛感情などは持たないけれども……女の子の成長は早いというが、これほどのものなのか、と感心させられる程だ。

少女の名前は羽山朋子「ハヤマトモコ」と言い、佐久間の勤務する春日崎大学病院の患者だ。

生まれつき心臓に異常を抱え、幼いころから入退院を繰り返してきた。

そして15歳になった現在も、

病院で入院生活を過ごしていた。

幼いころより佐久間は主治医として朋子の成長を見守ってきた。自分には二人の娘がいるが、佐久間にとっては朋子も自分の娘のよう

な存在だ。

昔から佐久間は毎晩、就寝時間になる前には必ず朋子の病室へと足を運ぶ。そして、わずかな時間をたわいもない話をして共に過ごすのだ。

「雪が降ると一気に寒くなるからね」

それに帰りは車の運転が大変だ、と付け加えて苦笑する佐久間を見つめながら、朋子は不思議そうに首を傾げる。

「どうして雪だと大変なの？」

「ん？雪があるよね、車がスリップ……滑りやすくなるんだ、だから事故が起こりやすい。気を付けないと」

「ふうん、」

佐久間の答えに、朋子は大きく首を縦に振って頷く。もっと掘り下げて問を掛けてくるかとも思ったが、予想に反して朋子はそれ以上の質問をすることはなかった。

「ねえ、せんせ？」

「ん？」

「外、どれくらい積もってる？ 今朝からずっと降ってたから結構積もってるでしょう？」

「どれ、見てみようか」

膝に乗せた掌に力をいれ声を出しながら腰あげると、朋子は先生年ねと言って笑った。

「うん、結構積もってるね」

「どのくらい？」

「かなり。朋子ちゃんひとり埋まっちゃうかも」

「ほんとに？」

「うそ。本当は20センチくらい」

「先生のうそつきー」

からかう調子で言う口を尖らせて不満をもらすが、すぐさま楽しそうにけらけらと笑い声をあげる。

そんな朋子の様子に佐久間もまた、顔を緩める。

しかし窓の外に視線を向け、病院の出入口に誰かが立っているのが見えると佐久間は不思議そうに眉を上げ、おや、と思った。

朋子の病室は3階だ。

ここからではその人物のさしている傘しか見えないが、もう随分長いことそこにいるのだろ。本来の傘の色が解らぬほど、上に雪が覆っている。

誰かの見舞いだろうか。

佐久間は自分の腕時計に目をやった。――8時半を少し回った所だ。

面会時間はとうに過ぎているが、その人物はまるで立ち去る気配はない。

そろそろ朋子を休ませた方がよい。彼女の体は弱いから。そして――
――、夜の見舞い客を院内へ入れてあげよう。外は寒いだろうから。

「朋子ちゃん、もうそろそろ行くね」
「うん」

一瞬少女の瞳が寂しげに揺れた気がしたが、それは本当に一瞬で、すぐに真っ直ぐに前から佐久間を見据えて相槌をうつ。

「……先生？」

病室を出る間際、突然朋子が呼び止める。

「ん？ なんだい？」

「明日は…、晴れるかな？」

「うーん…晴れるといいね」

「うん…またねせんせ」

そう言つて小さく手を振る。佐久間は部屋を出てから後ろ手でドアを締めると大きく溜め息をついて目をつむった。

彼女は強い。

いや、強くないなければいけないと思っている。

今まで一度も、佐久間は彼女の涙を見たことはない。薬による治療や、痛みを伴う度重なる手術にも、一度足りとも弱音をはいたりしないのだ。

たった15歳。

まだまだ人に甘え、人に頼って生きてもいい年頃だ。

けれども少女は、

人に甘える術を知らない。

きつとさつきも、佐久間を引き留めたかったに違いない。

行かないでほしい、側にいてほしい、

朋子がその言葉を口にしたなら、佐久間は自分の研究など放って、一晩中朋子の手を握り、話しをしてやりたい。一晩中抱き締めてやりたい。

しばらくして、部屋の中から聞こえてきた声に佐久間は辛そうに眉を寄せ、部屋を後にした。

——研究をしろ、佐久間。

お前に出来ることは、病気の治療法を探しだし、彼女を救うことだけだ。

そのためには、一刻も早く。

残された時間は残り少ないのだから。

少女を、救うのだ。

佐久間が去ったあと、廊下には誰かの鳴咽が洩れ……、
随分と長いこと、治まることはなかった。

桜龍の少年1

「いてえ」

「いてえ、じゃねえ。鉄平、テメエいつまで寝くさってやる」

頭に鈍い痛みを感じ目を開けると草場が顔をしかめて自分を見下ろしていた。どうやら殴られたらしい。

「だつて痛いんですよ。第一、寝てないっすよ、俺」

「言い訳はいらねえ」

「…はあ、すみません」

頭をかきながら適当に言葉を返すが、草場が凄味を効かせてにらみつけて来たので今度はすみません、と謝罪を述べながら頭をさげる。そんな鉄平の様子に草場は呆れたように溜め息を洩らし、顎をしゃくった。

「組長がお前をお呼びだ。早く行け」

「……俺なんかしましたっけ？」

「お前のことなんざ知らねえよ。いいからさっさと行け」

「はあ…じゃあ失礼します」

頭をかきながら名残惜しそうに横になっていたソファから体を起こし、鉄平は草場に軽く頭を下げて応接室を出る。

その足取りがふらついている様に見えて、草場は眉間に皺を刻んだ。

「おい」

鉄平の背中を見つめながら低く声を発すると、向かいのソファに座ってノートパソコンのキーボードを叩いていた男が顔を上げる。

「はい、」

「あいつ…シャブなんかやってんのか」

「鉄平の奴ですか？ さあどうでしょう……ちと分らないですが

……調べますか」

「…後で報告しろ」

唸るようにいうと男は小さく頷き、ノートパソコンを閉じてから小脇に抱え、足早に退室する。

静かになった部屋の中で、草場は溜め息をついた。

濃紺のスーツの胸元から煙草を取り出すも、掴んだ感触に小さく舌打するとそのままぐしゃりと握り潰す。

そして忌々しげに顔をしかめると、先ほどまで鉄平が寝ていたソファにどさりと腰をおろし、目を閉じた。

参加団体100、総組員3万人の規模を誇る指定暴力団桜龍会の直系参加の1つである広域指定暴力団、嘉島組。組は勿論のこと、桜龍会に刃向かう者に対しては容赦なく報復を与え、相手が屈服するまで冷酷非道な仕打を行う武道派として有名だ。

そしてその嘉島組を率いる嘉島弘輝「カシマコウキ」は、その行動力と人望の厚さから傘下団体の中でも圧倒的に多くの組員を抱えていた。

そしてその嘉島が、つい最近一人の少年を養子に迎えたのだ。

この話題は瞬く間にその筋な者達に広まり、皆を喫驚させた。

組長が跡取りを持たぬ場合の養子はそう珍しいものではない。しかし嘉島には、既に息子がいたのである。

若き組頭

ギシギシと軋む床を出来るだけ音を立てないようにゆっくりと歩く。しかしどれだけ静かに歩いても、少しでも体重がかかると床はすぐに悲鳴をあげてしまう。

長い廊下の突き当たりの襖の向こう、そこに嘉島がいる。なぜ自分が呼ばれたのかはわからないが、鉄平にとって決して良い話ではないだろう。

胸の中で小さく溜め息をもらしながらも襖の前に立つとその瞬間、床がギイッと一際大きな音を立てた。

「鉄平か、入れ」

「……失礼します」

その音で鉄平の存在に気付いた鹿島が、すぐさま部屋に入るように促す。鉄平は短く返事をする。と片手で襖を開け座敷に上がり、再び後ろ手で襖を閉めた。

その無作法さに露骨に顔をしかめ、嘉島はゆっくりと、そして不機嫌そうに目を眇める。

「……いつもながら、お前は礼儀というものを知らんな」

「あ……すみません。やり直しますか」

後頭部をわしゃわしゃとかきながら謝罪を述べて踵を返し、座敷の外へ出ようとする鉄平にもういいというようにしかめた顔の横で手を振り

「いいから座れ」

と自分の前を手で示した。

「鉄平、お前自分の組を持ちたくはねえか？」

鉄平が腰を下ろす様子をじつと見つめ、一息ついてから辺りを警戒するように声を潜めて鹿島が言う。もう七十をとくに越えているが、嘉島にはまだ若々しさがある。腹もさほど出ていないし、髪もまだ十分残っている。そして何よりも、低くドスの聞いた声が嘉島の貫禄をかもしだしていた。

「お前にはまだ早いと思っていたが考えが変わった。何事も経験というからな」

「俺にはまだ無理ですよ、」

伏し目がちに畳を見つめ、口元に薄く笑みを浮かべて小さく首を振る鉄平を見つめ、鹿島は低く声を震わせて笑った。

「なに、儂に大きな態度を取れるんじや、問題ないだろう。十分肝が座つとる。おまえには何れ鹿島組を継いで貰うつもりだが、お前はちとこの世界についてまだ知識不足だ。練習のつもりで組を持つてみればいい、それでも断るのか？」

「いえ……分かりました」

穏やかな口調の中にも有無を言わせぬ強い意思を敏感に察知し、鉄平は諦めに似た溜め息と共に頷いた。

「お前が組長になったら、さぞかしお前の両親も喜ぶだろうしな」

側にあつた木箱から葉巻を取りだし口に加えながら呟いた嘉島に鉄平は一瞬鋭利な視線を送る。それを見逃さず鹿島はふんと鼻を鳴ら

して葉巻に火をつけた。

「話はそれだけだ、下がっていいぞ」

「はい……失礼します」

嘉島の言葉に少し間を開けてから返事を返し、鉄平は一礼して部屋を出た。

俺の両親が喜ぶ？

ふざけている。どこからその言葉が出てくる、お前が殺したくせに。お前が。

俺に組を持たせる？

裏切り者の息子に？

老いばれめが。ついにもうろくしてきたか。

——…裏切り者の息子は所詮裏切り者でしかないんだよ。

長い廊下を歩む足を止め、鉄平は窓の外を見上げた。

灰色に濁った都会の町を、雪が静かに、包みこんでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3659a/>

この、胸の中に

2010年12月25日02時13分発行